

情 報 局 編 輯

週 報

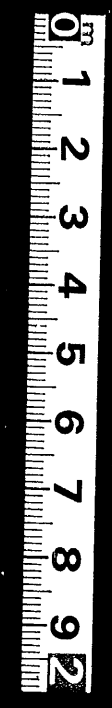
血に染む沖繩の山河

封ぜよ魔手

戦ふ物資

塩

四月四日 號
439-40合併號



○ 本誌より
○ 購読・寄稿は必ず同封

週言

今度の疎開は我々に色々と教ふるものがあつたが、その中でも荷物運搬に現はれた帝都の小運送力は大きな示唆を與へる。

強制疎開に伴ふ荷物の小運送は全く都民の自力で行はれたが、トラックあり、リヤカーあり、荷馬車あり、牛車あり、大八車あり、更に手押車、乳母車まで現はれて、至る處車と荷物とを以て充たされ、晝夜絡繹として絶えるところがないくらいであつた。

敵が本土に上陸し來る時、これを殲滅するのに最も大切なことの一つは補給であり、運輸である。敵の爆撃により交通網が壊されても、本土七千万國民の力を結集し、たちどころに萬全の補給が出来れば、皇軍が敵をみなごろしにし得ることは明らかである。

疎開に現はれた驚くべき小運送の力は、どちらかといへば自己保存の爲のものであつたが、若しこれを戦闘行爲に振向けた時、その成果は素晴らしいものであることがわかる。敵が上陸し來る時國民悉く兵となつて皇軍に協力し、その全力を發揮するならば、その偉力たるや期して待つべきものがある。

本土決戦の期は近づきつゝある。自己保存に向けしあのひたむきの努力以上のものを祖國の爲に捧げよ。然らば最後の勝利は我がものである。

血に染む沖繩の山河

大本營海軍報道部

南西諸島海面に 敵機動部隊跳梁

三月十八日拂曉、九州東南海面に姿を現はしたミツメル麾下の敵米第五十八機動部隊は、同日並びに翌十九日の兩日間に亘り、延二千五百機以上の陸上機を放つて、九州、四國、阪神の西部、日本各地に大規模な空襲を試み來つた。これに對しわが航空部隊は、十八日黎明より敵に對して先制攻撃を行ひ、果敢なる體當り戦法によつて、同十八日より二十一日までの四日間において、わが航空部隊は撃沈敵正規空母五隻、戦艦三隻、巡洋艦三隻、駆逐艦不詳二隻、陸隊百八十機以上といふ戦果を収めた。

蒙つて一應南方海域に退去したが、その僅か二日後の二十三日に至るや、再びその巨艦を南西諸島の沖繩附近海上に現はしたのである。そして同二十三日以來、連日數百機の陸上機を繰出して南西諸島一帯に來襲すると共に、沖繩本島に對しても熾烈なる砲射撃を加へつゝあつたが、二十五日に至るや敵兵力の一部は遂に廣良間列島の渡嘉敷島、阿嘉島、座間味島の空島に上陸するに至つた。

こゝにおいて、所在のわが皇軍はこれを適撃して奮戦すると共に、わが航空部隊並びに水上部隊は特攻體當りを敢行して、二十三日より二十五日までに敵大型艦五隻を轟沈、別々に大型艦五隻を轟沈または大破せしめ、百五十機以上を撃破せしめ、更に二十六日より二十八日までの三日間において我が方の確認せる戦果のみならず、撃沈敵艦一隻、巡洋艦六隻、巡洋艦若しくは驅逐艦一隻、驅逐艦七隻、掃海艇一隻、駆逐艦若しくは巡洋艦九隻、驅逐艦三隻、輸送船二隻といふ甚大なる損害を敵に與へた。

然しこれらの損害にも拘はらず、敵機動部隊は空母部隊の一群を南西諸島海面より九州東南海面に北上せしめ、一方マリヤナ基地よりのB29とも策應して大舉九州、四國の各要地に攻撃を加へ、沖繩作戦を牽制すると共に、南西諸島海面には空母二十隻内外を基幹とし、戦艦二十隻、巡洋艦、驅逐艦、上陸用艦船等を合し、水上艦艇百數十隻の大兵力をもつて、虎視眈々として沖繩本島上陸の機會を狙ひつゝあつた。そして沖繩本島への艦砲射撃も、二十五、六日頃には一日平均五、

六百艘ぐらゐつたが、二十七、八日には約二千艘となり、更に二十九日に至るや一躍七千艘以上に増大するに至り、かくて沖繩本島への上陸作戦は急速に本格化するに至つたのである。

慶良間列島から遂に 沖繩本島にも上陸

果せる哉、敵は三十一日朝来その一部をもち、慶良間列島より沖繩本島に逼る。飛石ともいふべき前島、神山島に上陸を開始し、越えて翌四月一日早朝を迎へるや、敵はいよいよ沖繩本島上陸作戦を展開し、その主力をもつて那覇北方嘉手納西方海面に艦を蔽つて殺到し、嘉手納南方五軒の梁江附近以北の海岸に上陸を開始し、他方同島南端の湊川に向つて上陸用舟艇を集結、同方面より上陸を強行し來つた。

わが皇土の硫黄島が、所在皇軍將兵の悲壯な玉砕と、一億國民の痛憤に、涙をのんで敵手に委ねられてから僅かに三旬、われわれは今も大父祖傳承のわが皇土沖繩島をも、憎むべき敵の脚下に蹂躪されねばならなかつたのである。



であらう。正に難國以來未曾有の困難が、いまわが皇土の南端に襲ひ來つたのである。

米内海相が「忍び難きを忍び、耐へ難きを耐へて隠忍した」といつたのが海軍部隊も、つひに決然断を決して南西諸島方面に出撃した。陸、海軍空の特別攻撃隊は、還らざる翼を運んで敵艦上に撲殺し、特攻魚雷艇隊も肉弾體當りの華と散つた。そして全軍悉くが特攻隊當りを敢行した結果、四月二日までにわが航空部隊並びに水上部隊によつて收めたる戦果は判明せるのみにても撃沈空母一隻、巡洋艦六隻、駆逐艦二隻、艦種不詳六隻、輸送船一隻、上陸用舟艇十六隻に達し、撃沈若しくは撃破は空母二隻、戦艦一隻、戦艦若しくは巡洋艦一隻にして、撃破したるものは空母二隻、戦艦一隻、戦艦若しくは巡洋艦一隻、輸送船六隻、油槽船若しくは空母一隻、艦種不詳四隻に上る。そして、これらの戦果をも含めて三月二十三日、敵機動部隊が沖繩海面に出現して以来、同方面海上において四月三日現在までに收めたる戦果の概

合は大要次の如く撃沈九十六隻、撃破若しくは撃破九隻、撃破七十二隻にして、撃沈敵の總数は實に百七十七隻以上といふべき大重に達してゐる。

航空母艦	四隻
戦艦	三隻
戦艦若しくは輸送船	一隻
大戦艦	五隻
巡洋艦	二十二隻
巡洋艦若しくは驅逐艦	一隻
驅逐艦	十六隻
掃海艇	一隻
輸送船	三隻
艦種不詳	二十四隻
上陸用輸送船	十六隻
撃沈若しくは撃破(九隻)	
航空母艦	二隻
戦艦	一隻
戦艦若しくは巡洋艦	一隻
大戦艦	五隻
撃破(七十二隻)	
航空母艦	三隻
戦艦	二隻
戦艦を含む大型輸送船	十一隻
油槽船若しくは航空母艦	二隻

戦艦若しくは巡洋艦	十二隻
巡洋艦	四隻
巡洋艦若しくは輸送船	一隻
驅逐艦	十二隻
輸送船	十一隻
艦種不詳	十五隻
合計	百七十七隻

英の殘存艦隊も参加 太平洋兵力を總動員

皇軍の擧げた戦果は、かくの如く正に甚大な戦果に達してゐる。然し敵は沖繩本島上陸作戦に無慮一千四百隻の艦船を集結したとさへ發表してをり、若し敵側報道が事實を傳へたものとすれば、皇軍の赫々たる大戦果をもつてしても、尙ほ且つ敵兵力の僅かに一割を居つたに過ぎない結果となり、従つてわが戦果の甚大をもつて、戦局を些かにても樂觀するが如きことがあつてはならぬ。

大宮島のニミツ司令部の發表するところによれば、敵は沖繩上陸作戦の展開に當つては、スプルーアンズ海軍大將麾下の第五艦隊を根拠とし、これに配するにミッチェル海軍中將麾下の空母機動部隊、更にターナー海軍中將指揮の大陸兩用部隊、バックナー陸軍中

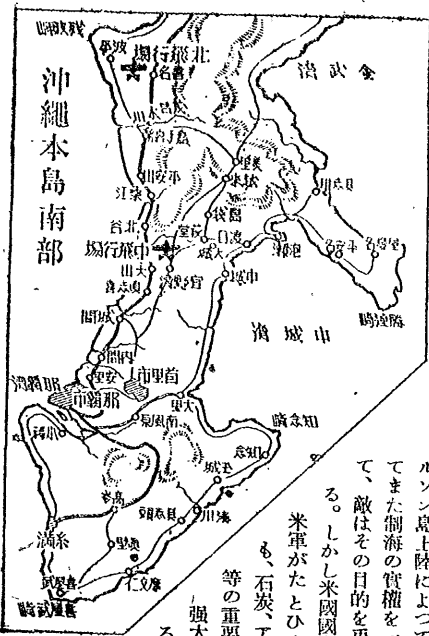
將指揮の陸上部隊等に参加せしめ、太平洋兵力の全力を擧げて作戦を強行すると共に、フレーザー麾下のローリング海軍中將の率ゐる英國太平洋艦隊をも参加せしめてをり、かくて敵は世界の二大海軍國たる米英の總力を傾注してわれに肉薄し來つたのである。

そして、こゝでも一考を要することは戦果が戦局を支配するためには、その戦果が敵兵力を根こそぎ撃滅するものであるか、或ひは敵の作戦企圖を粉砕するに十分なるものであるかといふことである。硫黄島において皇軍は、敵の上陸兵力四万五千名中の三万五千名を撃滅して圧倒的戦果を擧げたにも拘はらず、最後には皇軍全員玉砕の犠牲において、つひに同島を敵の占領に供せねばならなかつた現實をわれわれはもう一度再認識せねばならぬのである。

沖繩戦局におけるわが戦果の快報は、その後も引續いて齎らされつゝあり、そしてまたわれわれはその赫々たる大戦果が相次いで擧げられることを心から待望し、確信するものである。然し戦局の大勢は寸毫の樂觀を許さず、絶対に重大なものであり、皇國の民族の存亡は正にこの一戦に懸けられてあるといふべきである。

對日包圍陣を壓縮し 敵は東京進軍を企圖

敵は今日まで日本攻略の戦法として爆撃戦術と、封鎖戦術の二つを併用して來つた。そしてその爆撃戦術より、敵は支那大陸並びにマリナの基地を獲得し、B29の長距離爆撃によつて、日本本土の主として生産地帯、軍事施設等を破壊し、わが戦力を減殺せんとして來たのであるが、大陸基地は地理的條件より種々なる制約を受けるし、また



たとひB29の威力をもつてしても、二千数百軒の距離をへだてたマリナ基地よりの日本本土に對する爆撃は、いささか長鞭馬腹に及ばぬ備もあつた。そこで敵はこのマリナの基地を更に前進せしめんとして、ついに硫黄島への推進に成功したのである。硫黄島一東京間は一千二百軒にして、マリナ一東京間の距離二千四百軒を恰度二分の一に短縮したわけである。

また敵はその封鎖戦術よりして、日本本土と南方との連絡線送路を遮断せんと企て、比島奪還作戦を遂行したものであるが、ルソン島上陸によつて比島一帯の制空、従つてまた制海の實権を一應把握することによつて、敵はその目的を兎に角達成したのである。しかし米國務次官グループが「日本は米軍がたとひ臺灣以南を封鎖すると、石炭、アルミニウム、鐵、食糧等の重要物資を自給自足し得る」といふ通り、たとひ比島の喪失によつて南方資源の流入を阻止されることも、日本は滿洲、支那の大陸との連絡を確保する限りは何等の

致命傷を蒙らぬので、更に敵はこの日本と大陸、朝鮮、臺灣との連絡路をも遮断し、日本本土を孤立無援の状態に完封せんとし、略奪企圖よりして、沖縄上陸作戦を強行したのである。

一億の生死を賭けし 本土決戦の火蓋切

かくて太平洋戦局は、わが本土の攻防を繰つて文字通り日本の生死を決定する最終決戦の歴史的段階にその巨歩を踏入れたのである。われわれはラバウルにおいて、マリナにおいて、そしてまた比島において、既に幾度か日米決戦の劇的戦局を迎へた。然しそれらの決戦において、われわれは遺憾ながら常に戦勢の支配権を敵に譲らねばならなかつたのである。

然らばそれらの決戦において、折角敵攻撃の絶好の戦機を捕捉して置きながら、一體何故にわが軍は涙を流して後退せざるを得なかつたのか。それはいふまでもなく敵航空兵力の圧倒的優勢の前に、われわれは制空権を敵に奪はれたからに他ならぬ。そして近代戦においては、制空権のなきところに制海権のあり得ぬことも亦言ふまでもない。

ために制空権をわが手に獲得し得ず、つひに無意にも敵の神機を幾度か迎へたのである。ところが、今までの決戦場は何れも太平洋上の占領地域であり、ラバウル決戦の次ぎにはマリナの決戦場があり、またマリナ決戦の次ぎには比島の決戦場があり、比島決戦の次ぎにはまだ本土の決戦場があつた。然し本土の次ぎの決戦場は絶對にないのである。そしてその本土決戦の火蓋が、ついに南西諸島において切られたのである。全くの背水の決戦である。

そして硫黄島戦局の一段落と共に、敵がだいたいの南西諸島方面に次ぎの上陸作戦を展開し來るであらうことは「日本本土に對する最後の攻撃を開始するために、硫黄島の一基地を入手したのみでは不十分にして、米軍は更に多くの基地を獲得せねばならぬ」といつたニミッツの言葉や、或ひはまた日本攻略のためには遠くの大陸接岸作戦よりも、直接日本本土の心臓に真正面からメスを打ち込むべきである」と強調したマックアーサーの豪語などによつて大體豫想されたところである。

かくて敵が若し沖縄を完全支配することあれば、敵はマリナ、比島、硫黄島、沖縄の四つの基地を結ぶ對日基盤に據つて、わが本

土への爆撃、並びに封鎖の戦術を一段と大規模、且つ頻りに強化して來るであらうことはいふまでもない。然し爆撃と封鎖は如何に強化されようとも、そのみによつて戦争全體の勝敗が決定されるものではない。現にヨーロッパ戦局が全世界に生きた教訓を示してゐる。従つて日本を完全に屈服せしむべき唯一の途が「東京への進軍」にあり、日本民族の抹殺にありとする敵の作戦企圖は、ルーズベルトの放言を俟つてもなく、夙に明白なところである。故に先の硫黄島上陸といひ、今回の沖縄上陸といひ、何れも日本抹殺作戦展開のための最後の足場を固めんとするものなることは言ふまでもない。

沖縄一九州間六百軒の距離をもつて、沖縄戦局の重大性を些かにでも過小評價せんとする傾向あらば、それは飛んでもない、誤見である。即ち六百軒の空間は、航空機をもつてすれば僅かに二時間足らずの距離であり、現に二千数百軒を隔てたマリナ基地からの空爆が、如何にわれわれ一億國民を脅威しつゝあるかを體認すれば、航空基地の前進が、如何に決定的な重大役割を演ずるものなるか、判明するであらう。この故に敵の沖縄上陸の目的は、先づ第一に航空基地の敷設であり、第二にはその制空権の傘下において陸上基地を

前進せしめんとすることにあることは火蓋を切るよりも明らかである。そして敵は同方面の制空、制海権を強奪し、滿洲、支那、朝鮮、臺灣と、わが本土との連絡を封鎖し、更に硫黄島基地と呼應する爆撃によつて、わが本土の生産力と軍事施設を徹底的に破壊し、遂に、いよいよ日本本土上陸の最終作戦を断行せんと企圖してゐるのである。

従つてわれわれは今こそ、南西諸島に日本抹殺の足場を築かんとする敵を断じ、江津津に蹴落さなければならぬ。沖縄縣民數十万の同胞は老幼男女の別なく、今や家郷の山河を鮮血に染めてわが皇土の一角防衛に殉せんとし、をり、陸、海、空軍は既に悉く特攻隊となり、艦船も、飛行機も、新兵器も、全部を傾盡して、この一戦を死守せんとしてゐる。そして太平洋の戦局は、この一戦を死守し得るものが制空権の確保にあることをわれわれに明示してゐる。われわれ一億は今こそ人も、物も、凡べてを戦力増強に直結せしめ、最後の死力を發揮して國難打開に挺身せねばならぬ。一億國民の生死を賭けた本土決戦は既に火蓋を切つたのである。いま一億の總力を出し切らずして、恨みを千載の青史に遺すこと勿れ。大日本帝國は皇統二千六百年、天皇と共に存し、一億軍民は悉く、陸下の強子たることを銘記せねばならぬ。



封ぜよ魔手

—本格化した敵の謀略攻勢—

イタリアの思想戦

戦前、敵イギリスの宣傳研究家は、その著書の中で「イタリアに對する思想謀略に成功することは比較的容易である。イタリア國民はフランスの嚴重な統制下にありながらも、心の底には親英感情を持つてゐる。われ／＼は戦局が進展して、イタリアの海岸から我が英國艦隊の遊弋するのを望見し得、イタリア本土の上空に我が飛行機が亂舞飛翔する時期を待てばよい。その時期さへ来れば云々」と述べてゐる。そして残念ながら事實その通りになつてしまつたことは、讀者のよく知つてをられる通りである。

米英軍の北阿大陸、續いてシシ

リ島の失陥と戦局が次第に不利になつて来るにつれて、イタリアの軟弱分子は士氣沮喪し、酷しい銃後生活に對しても悲鳴を擧げるやうになつて来た。

これを見て奸謀至れりとした米英側は、或ひは大規模な都市空襲によつて脅迫し、或ひは恐喝と甘言とを陰險に織り交ぜた謀略放送によつてたぶらかし、かうして空襲にはおびえ懐き、甘言によつて前途に頼むべからざる希望を幻想したイタリア軟弱分子を、あの祖國を賣る無條件降伏に追ひ込んできたのであつた。

米英のビラや放送による謀略宣傳は、或ひは敵はフランスであつてイタリア國民でないと思き、フランスを打倒さへすれば、名譽ある條件による休戦が可能だと思はせてゐる。

しかしムソリーニが失脚し、イタリア國內が和平運動で混亂状態に陥り、最早この類勢を立て直して戦争を續けて行くことは不可成になつたと見たとき、米英側の態度は單を反すやうに一變した。それまでの甘言謀略による約束は他人の言葉でもあつたやうに無視して、無條件降伏を押しつけたのである。無條件降伏を除機なくされた後のイタリア國內の事情がどんなものかは、外國電報がしばしば傳へて來てゐる通りである。

事實上米英軍の占領下に置かれてゐるイタリア國民が、米英の

兵隊の殘忍な暴行に泣き、食糧その他の物資は徴發されて飢餓と酷寒に震へ、女性の誇りは踏み躪られ、乳兒幼兒の死亡は激増する等、敗戦國の悲惨な状況はわれわれに耳を塞ぎ眼を蔽はせるものがある。かつて米英の謀略放送が述べた、イタリア國民は敵ではないとか、名譽ある休戦條件とかの内容は、果して何處に發見することが出来ようか。

以上、こと新しくイタリアの無條件降伏とその後の経緯を、に述べたのは、これだけのことを一應頭に入れて置いて、さて現在敵米がわれ／＼日本人に對してどんな思想戦を仕掛けて來てゐるかを検討すると、敵が抱いてゐる考へが、一目瞭然となつて來ると思ふからである。

敵はわれ／＼日本人に對して、いよ／＼本格的な思想謀略を試みて來てゐるのである。こゝに本

好機來とほくそ 笑む敵

「脅迫」といふ文字を使つた意味は、從來も敵はわれ／＼に對していろいろな謀略を仕掛けて來てはゐたが、それは現在に較べては比較にならぬ程弱體なものであつた。われわれも敵の思想謀略といふことについては繰返して警告され、これを援ね返すべき心構へを説かれて來たのであるが、この思想防衛の態勢をいよ／＼強化すべき時が、敵の本格的攻勢に伴つて今こそ來たといふべきである。

敵の思想攻勢が本格的になつて來た事情から先考へて見ると、第一に戦局は最近急速に進展し、戦線は本土に移り、敵機の本土空襲は頻りに加へ、或ひは機動部隊が近海に出現して、その機動部隊を以て内地を窺ふに至つた。この戦局が一見敵に有利に展開して來たのを見て、敵が思想謀略の時期を至れりと思つたのであらうことは、イタリアの場合と同様である。

一方、戦場が本土から遠く離れてゐる間は、敵も強力な思想謀略

の手段がなかつたが、今や敵機がわが上空に飛來することとなつたので、敵は初めて前大戦以來の常套手段である官報ビラの撒布を行ふことが可能となつた。現に先般の機動部隊の關東地方來襲の際以來、敵は多種の宣傳ビラを撒布するやうになつた。

また放送について、従來わが國では短波の受信機は、一般には使用を禁止されてゐたため、敵は遠い發信地から一舉にわれわれの受信機の中にその聲を飛ばし込ませる手段がなかつたのである。ところが最近敵の前進基地が段々と本土に近寄つて來たので、中波の放送でも本土に届くやうになつた。敵は既にマリアナ方面に發信施設を整備し、中波の放送を開始してゐる。中波の放送ならば、放つて置けば遠慮會社もなくわれ／＼の受信機の中にもぐり込んで來ることが出来る。現在われ／＼がまだ敵の聲を聞いてゐないのは、當局が万全の方途を講じて、敵の放送を阻止してゐるか

らに他ならない。

かう考へて來ると、敵は太平洋の戦局から、また本土空襲からわれ／＼國民の間には相當の精神的動搖があると思つて、思想謀略の時機よく到來とほくそ笑み、また同時に空襲とか、放送とか強力な謀略戦の手段を獲得するに至つたのである。敵の思想謀略が今後ますます熾烈になるだらうことは容易に想像出来るところである。

敵は何をさしや いて來るか

それでは敵は官報ビラや放送などで、どんなことをいつて我々に働きかけて來るだらうか。それは從來敵が行つて來た謀略宣傳の内容を檢討して見ると、その狙ひが大體列る。第一には日本の國內分斷を企圖するもの、つまり軍官民の離間、相剋を目的とするものである。戦争は軍人か、或ひは或る指導者が勝手にはじめたものだと思ふ一般民衆はきびしい銃後の宣傳、一般民衆はきびしい銃後

生活に苦しんでゐるが、軍人や高官は相變らず暖衣飽食してゐるといつたやうなデマなどはこの種類に屬する。第二はわれ／＼國民の間に厭戰、敗戦の思想を種々つけようとする目的のもの、例へば日本の戦果發表は誇大であるとか、敵は、敵側の戦果を大袈裟に傳へ、或ひはまた敵の武力、生産力を過大に宣傳し、かるが故に日本の敗戦は必ずであるとか説くやうなものがこの類である。第三は國內に和平思想の播種を企圖するもの、例へば緩和した和平條件の流布などである。前大戦末期に米英がドイツに對していつた無賠償不割讓の和平方針の謀略宣傳のことは餘りにも有名であり、また今度のヨーロッパ戦争で米英が「名譽ある條件による休戦」、「戦後の尊敬すべき地位」を餌に甘言謀略を行つたことは冒頭に述べた通りである。

最近報道された敵米の對日處理案など、不遜にも日本の國體の變

敵にきて言及し、如何に彼等が日本を悲れ、憎み、その抹殺を企圖してゐるかを彼自ら暴露したもので、これは宣傳からいへば、恐らく敵に属するものといへるもので、實際に敵米の眞の面目を見たものである。しかし、われ／＼の間に和平気分を起さうとするために、敵は心にもないゆるやかな和平條件などを流布したり、或ひは今度の戦争は一部指導者が、或ひは軍が勝手に起したものであるから、敗けても、一般國民はひどい目に遇ふ事はないといつたやうな甘言を囁いて來ることは想像に難くない。

いつたわれ／＼日本人は、恐らく宣傳には騙すこれを見換する氣魄を持つてゐるが、甘言謀略に對しては意外うっかりその手に乗るといつたやうな人の好い弱點を持つてはゐないだらうか。裏切りイタリヤの慘狀に鑑みて、よく／＼警戒を要する所である。

ピラを拾つた途端に思想戦の最前線へ

かうした敵の思想攻勢に對するわが方の對策は如何なるものであらうか。勿論當局はこれに對してあらゆる手を打つてゐる。前にも述べたが、敵が謀略放送をやつてゐても、われ／＼の耳に未だ敵の聲が入つて來ないのは、當局の施策のお陰である。

敵機が撒くピラにしても、最近に出た内務省令によつて、われわれはそれを発見したり拾つたりした場合は、早速警察官なり、憲兵なりに届け出る義務を負ふことになつた。敵のピラの内容や、謀略放送の内容を人に語つたりすると、人心を惑亂するものとして流罪罰の罪に問はれることは、從來の通りである。

しかし考へて見れば、かうした當局の措置は思想戦防衛策、いはゞ消極策である。守るよりも攻める方が有利なことは、武力戦で

思慮戦でも相違はない。敵は現

在に我々の防壁を執り得る立場に立つてゐる。われはこれを防禦する態勢が強い。敵がその機上からピラを投下することを阻止する方が、われの頭上に落ちて來る事は免れない。當局の有效適切な措置にも拘はらず、敵の聲が瞬間的にでもわれ／＼の受領機に入つて來ることが全無ないとは保障出來ない。われ／＼が敵の思想戦攻勢の突玉の前に曝されることは、今は避け難いといつても過言ではな

い。そして、われ／＼が銘記しなければならぬことは、この思想戦の弾丸は、武力戦のそれと同様に、恐るべき破壊力を持つて得ることである。武力戦における弾丸は、眼の前に死傷者を出すから恐れられるが、思想戦の紙と塵の弾丸は、肉體的な危険がないだけに、兎角その恐ろしき、精神的な危険が輕視され勝ちである。しかし、ピラや放送も敵のわれに對する恐るべき攻撃だといふことを忘

れてはならない。

敵が思想謀略戦の陰險惡辣なる老手であることは既に定評がある。しかし、それだからといつて、わが防壁が彼の攻勢に劣ると早合點する必要は毫もない。敵へて宣傳研究專家の所説を引用するまでもなく、明らかかなことであるが、宣傳者の行ひ得る手段には自ら限度がある。

敵は機上からピラを撒くことは出來るが、敵の行爲はピラを投下するといふところまでが限度で、それから先は、われ／＼がどうするかにまかせなければならぬ。下界にゐるわれ／＼を無理にピラの落ちてゐる所まで連れて行つて、それを讀ませる方法は敵にはないのである。放送についても同様で、敵は謀略放送の電波を發射することまでは出來るが、その放送を聞くか聞かぬかは實はわれわれの勝手なのである。この點に思ひを致すと、敵のかうした思想謀略の努力を無効にする鍵は、われわれの手中に在ることを知るので

とは言ふものの、たとひわれわれが敵のピラなどには目もくれない、敵の放送などは耳も着すまいと思つてゐても、眼の前にピラが降つて來、或ひは足下にピラを

発見したとき、これを見ずに過すことは出來ないだらう。また國內放送を聞いてゐるとき、突然、敵の放送が受信機に入つて來たとしたら、聞受を容れずに兩耳を塞ぐことは不可能である。かうした場合には、われ／＼は自分の意思に反して、敵の腕手に直接接してしまふことになる。この場合、われわれは青嵐なしに敵の思想戦攻勢に對する防壁第一線に立たされてゐる。われ／＼は自分自身を防禦すると同時に、われ／＼の背後にある同胞に敵の毒手が届かぬやうに戦はなければならぬ。そのためにはわれ／＼はどうしたらよい

か。或る人が「敵の宣傳ピラを見たからその末尾に、……右の如くお借

び下さらば幸甚に存じ奉り候、敬具 ルーズヴェルト、チャーチル

より、……といふ文句を附け加へて見るとよい」といつたが、至言だと思ふ。

いまこれを眞似て、敵のピラを見たり放送を聞いたりしたら、塗端にあの日本抹殺を呼號し、硫黄島の勇士を玉碎させ、またテロ爆撃でわれらの同胞を無残に殺戮したルーズヴェルト、チャーチルの儂々しい顔面を想ひ出し、此奴等がこんなことを言つて來てゐるのだぞ、と考へて戴きたいと思ふ。さうすれば、ピラや放送の内容が如何に陰險な虚偽に充たされたものであるか一日瞭然となるだらう。

流言蜚語は利敵行為

敵の宣傳の内容を他に傳へることと利敵行為であることを知らなければならぬ。前にも述べたやうに、敵の宣傳行為には限度がある。われ／＼が偶然ピラを見、放送を聞く、それまでが敵のなし得るところである。若し偶然敵の宣傳を見聞きしたものが、それを近所合壁に傳へたとしたら、それは、敵の爲に敵のなし得る限度以上の所を手傳つてゐるわけであり、利敵行為といつても少しも過言ではないのである。

流言蜚語の恐るべきことを知らない人は、今では一人もあつてゐない。しかも國內に流言蜚語が總えず、見やうによつては、戦局が急迫するに連れて却つて増加してゐることは惜けない話である。これは主として人間の弱點であるところの好奇心、知つたか振りがら生ずるもので、利敵行為と意識してゐることではなからうが、最

近敵が撒いたピラの内容について

も、今度は何處其處を空襲する」と書いてあつたとか、「この次ぎは何月何日に來襲する」と書いてあつたとか、全然事實無根のことが相當範圍に流布されてゐるに至つては、言語道斷といはざるを得ない。これは敵のピラや放送の内容を他に傳へるやうな、敵の手傳ひをしないどころか、全然敵に代つて謀略を行つてゐるのも同様である。どうもわれ／＼は好奇心や知つたか振りがひど過ぎるやうである。餘程戒心せねばならぬ。

以上は當面の問題になつて來てゐるといふ意味で、主として宣傳ピラや謀略放送のことのみについて述べて來たのであるが、敵がわれわれに仕掛けて來る思想謀略は、何もピラや放送に限つたものでないことは勿論である。飛行機から投下するものもピラばかりではない。偽造紙幣を投下して經濟攪亂を狙つたり、偽造の衣料切符を撒布して配給を混亂させたり、

或ひは飲食物や嗜好品を投下して
平和時代の安樂さを他任せ、或ひ
は爆撃を仕掛けた玩具や萬年筆等
を投下して、思はぬ被害に精神を
動揺させようとする。敵のあの
手には際限がない。

ローロツの戦場の例を見て
も、イタリヤ侵入に先立つて大量
にばら撒かれた百リヤ紙幣、ドイ
ツ領ライン上流の森や草に、風に
吹かれて散らばつてゐた衣料切符や
食料切符、イタリヤで撒かれたデ
ヨレートやマカロニ等が、枚舉
に絶たしてゐる。

何も宣傳
ビラを投下しなくても、敵は空襲
それ自體を思想戦の手段に用ひて
ゐる。最近のが都市に對する夜
間爆撃が、いはゆるテロ爆撃で、
人心を恐怖と不安と混亂の底に叩
き込み、そしてわが戦意を挫折し
ようと狙つた思想的空襲であつ
たことは言ふまでもないのであ
る。

思想戦の根本を 忘れるな

敵は今後ともあらゆる陰險、悪
辣な手段方法で、われわれの思想
戦を試みて來ることは必せりて
ある。

しかし繰返していふやうだが、
思想戦の問題は敵が如何に巧妙
な、或ひは強力な方法で敵が攻め
て來るかや問題ではなくて、これ
を受止めるわれわれの心構へがし
つかりしてゐるか否か、勝敗を
決する鍵であることを忘れてはな
らない。

ここで冒頭に述べたイギリスの
宣傳研究家の言を今一度検討して
見よう。彼は「イタリヤ國民の心
の底には親英感情がある」と指摘
してゐる。イギリスと戦ひながら
も、尚ほ且つ捨て得なかつた親英
感情、これがイタリヤが敵の思想
謀略の前に胸甲をなく屈伏した最
大の原因ではあるまいか。

と、はじめから自國の戰爭目的に
對して確たる信念が足りなかつ
たこと等々が、イタリヤの思想戦
的敗北の原因だつたのではない
か。この思想戦上の弱點があつた
ればこそ、米英の謀略がつけ込む
隙を與へてしまつたのである。

今やわれわれは本土決戦を覚悟
し、ひたすら戦力の充實に努力し
てゐるのである。政府も軍當局も
機會ある毎に、神機を捉へて敵を
殲滅すべき覚悟と自信とを表明し
てゐる。

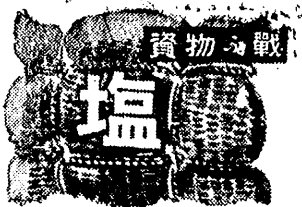
國民は萬一この戰爭に敗れたら
ば、如何なる運命が神國日本の
前に待つてゐるかをよく承知し、
是が非でも戰爭に勝たねばなら
ぬ。また勝つためにはどんなこと
でもする必勝の信念に燃えてゐる
のである。

この鐵壁の思想戦態勢のある限
り、敵がどんな思想謀略を試みて
來ても、それは鋼鐵の扉を赤手で
叩くやうなもので、てんで齒の立
ちやうはないのである。われわれ

は根本の問題として、この鐵壁の
構へをいよいよ強化しなければな
らない。

空襲に怯えて仕事に手のつかな
い者はないか。眼前の戦局にうろ
たへて必勝の信念に動揺を來して
ゐるものはないか。殿しい銃後生
活に悲鳴を擧げかけてゐる者はな
いか。萬一少しもそんな氣持を
持つ人が出たら、それこそ敵の意
計に負ける」とは思想戦
の根本を顛いた名言である。前大
戦でドイツが手をあげた時「もう
一週間ドイツが戦ひ続けたら、イ
ギリスの負けだつた」とは、イギ
リスの戰爭指導者の僞らぬ迷悞だ
つたのである。

われわれはこの思想戦の根本を
しつかりと把握した上で、さて敵
の試みて來るビラや放送などの、
あの手に乗せられぬやうに
警戒する。かうして、敵の思想謀
略の努力を水泡に歸せしめてやら
うではないか。



生きるための塩

食糧としての塩の用途とか重要
性については、いまさら一々取り
立てていふまでもありませんが、
たゞわれわれは塩が調味料や食品
の製造用として必要なばかりでな
く、われわれの生活の維持發展の
ために、生理的に欠くことのでき
ない、絶對的な必要品である
といふことを忘れてはならないの
です。

人間に塩が必要なと同様に、
家畜も塩がなくては生きてゆけな
いのです。牛が一月に二、四〇
〇グラム(家庭配給の一ヶ月一人
二〇〇グラムの一年分の塩を食
べるといへば「まさか」と思ふ人
が多いでせう。馬も牛ほどではな
いが、人間よりも多量の塩を食べ
ます。その他、山羊や綿羊やいろ
いろの小家畜用の塩を合はすと一
箇年には数万トンといふ多量にな
ります。

「腹がへつては戦いができぬ」と
いふ。國民の健康は決勝の前提條
件です。この意味で、生きるため
の塩は、とりもなほさず「勝つた
めの塩」ですが、塩にはもつと戦
争に直接な重要用途があります。
飛行機増産の必要が今日ほど大
きいときはありません。その飛行
機をつくる資材のうち、最も多量
に要求されるものは、アルミニウ
ムとマグネシウムですが、そのア
ルミニウムの製造にはソーダを、
即ち塩を必要とし、マグネシウム

勝つための塩

も「住」にも塩が必要です。ス・ラ、
人相はソーダを原料としますが、
そのソーダも塩からつくられま
す。ガラスも、紙も、ソーダが原料
です。ソーダは化學工業の基礎原
料であつて、染料、醫藥、化學藥品
その他、ソーダを使用する製品の
種類は、一々枚舉することのできぬ
ほど多種多様です。皮革、馬車や水
産皮革の製造にも塩を使ひ、陶磁
器の製造にも塩が必要なのです。

塩を造らう

直接戰爭遂行上の塩の需要激増
についてはいふまでもありません
が、勞働の強化、砂斯から塩への

調味の移行、食物の塩蔵傾向の増大などによつて、食料用としての塩の需要は、戦時下ますます急激に増加して来ました。かうして、塩はなくてはならないものが現れて来ます。

ところが、我が国内地の最近の塩の生産は、食料だけの需要をさへ満たすことのできない状態に陥つて、大部分は海外からの輸入に依存してゐるのです。戦局の現狀を直視するとき、われわれは、これによいのかといふ重大な疑問を抱かざるを得ないのです。「日滿支自治経済圏の確立」といふ點では、塩は既にその態勢が整つてゐます。昭和十二年に着手された「近海塩増産計画」の成果によつて、恰も大東亞戦争勃發の當年たる昭和十六年に、日滿支を連する塩の生産力は、その需要を充たしては餘りあるほどに躍進を遂げ、完全に第三國依存を脱却することができたのです。しかし、戦局はますます船を要求します。日滿支の塩自給態勢が確立してゐる

ても、塩のみに貴重な船腹を自由に使用することは許されません。塩自給態勢強化のために、政府はあらゆる方策を講じてをり、親塩業者の本年度の塩生産目標は前年度の五割増を決定されてゐます。これは一通りの努力で實現すべきの大増産ですが、関係官民の決定的努力によつて必ず目標の達成されることを期待してゐます。

しかし、これだけではまだまだ自給には不十分なので、内地の全海岸線を動員して、各家、各業者、その他あらゆる部門の方々に一戸残らず自家用塩の大増産をお願いしたいのです。

自家用塩の製造は極めて簡単に、自家用塩の製造は無制限です。

個人でも、隣組でも、學校でも農業者でも、その他誰でも自家用塩を造つて差支へなく、用途、數量、製造方法等にも何等の制限がありません。

二、許可も要りません。

單に製造の場所、方法、見込數(年額)と用途とを、製造を始めてから一ヶ月以内に最寄の專賣局(支店)に提出して、製法、場所、見込と届けなければいけません。

一、自家用塩の製造施設は國庫から五割までの補助金が交付されます。

二、自家用塩の製造施設は國庫補助金の交付は、原則として設備費二百円以上のものに限ることになつてゐますが、自家用製塩の趣旨に叶つた優秀な設備には二百円未満のものにも補助金が交付されます。

三、専賣局で技術的指導をします。

四、下、簡単な解説書を準備中で、要項があれば實地に講習會等を開催する用意もありません。

五、餘つた塩は買上げます。

希望があれば、自家用塩の餘りは、いつでも專賣局で適當の價格で買上げます。

自家用塩の造り方

自家用塩の製造方法いろいろ

あつて、醬油醸造家や水産業者などで本格的に行ふときには、專賣局に打合せされる方がよいのですが、ここでは、家庭や隣組等に適合した小規模の方法を二、三ご紹介して置きます。

海水を直接鍋等に入れて煮ると、非常に簡単な方法ですが、多量の燃料を要するし、鍋等を傷め易いので、あまりお奨めできません。その前に氣温や風力等を利用して、なるべく濃い海水、即ち鹹水を造る工夫をしなければなりません。

一、鹹水を造る小仕掛で簡單の方法は、一、二寸の深さの浅い水缸に海水を一、二寸の深さの浅い水缸に入れて、日當りと風通しのよい場所に置き、自然に蒸發させることです。

二、いさ少し能率をよくしようと思へば、この水缸の底になるべく色の黒い砂を一寸位の厚さに敷き、その上から砂が十分濡れる程度に海水を撒いて、砂の表面から蒸發させればよいので

す。何かで砂をとぎよく搦いで、表面に筋目をつけると、蒸發が一層早くなります。砂が乾いたら、また海水で濡らし、何回か繰返すと、だん／＼砂に塩分が蓄積してきますから、この砂を、底に布を敷いた箆か籠の中に集めて、そこから海水を掛け、落ちて来る液を掬めると鹹水が出来ます。夏の天氣のよい日には面積一坪位の水缸を使つて上手にやれば、一日に塩六〇〇グラム分の鹹水が得られます。

出ないやうにして、地盤の表面に砂をこく薄く撒いて置き、塩田の高い方の側から海水を少量づゝ萬遍なく流せば、海水は下端に集つて水が蒸發して、相當濃厚になります。海水を萬遍なく流すために、塩田の高い方の側に、塩田の幅と同じ長さの竹に小孔をたくさんあけた籠を置いて、これを海水を入れた桶と連絡して置き、桶の水が籠の小孔を通じて流れ出るやうにします。塩田の低い方の側にも受筒と桶とを設けて置く必要があり、三、四回繰返すと相當濃厚な鹹水が得られます。

六、鹹水が出来たらこれを煮るわけですが、この際とくに注意を要するのは

(一) 塩分は濃さをさげさせるから、なるべく鍋は鉄製のものをなるべく使ふこと

(二) カラ／＼になるまで煮詰めないこと

鹹水が煮えたと上に泡が出てきますから、これを拍ひ除けると次第に塩の結晶が開始されます。これをあまり底に溜めないで、ときどき拍ひ上げて箆か籠に取り、煮詰まらぬうちに鍋を下します。残つた液は苦汁です。拍ひ上げたまゝの塩には苦汁が着いてゐますから、そのまゝ、数日置いて、十分

苦汁を垂らせば立派な食塩が出来上ります。

なほ、燃料と手取の無駄を避けるために、醬油用、漬物用等のやうな用途には、なるべく鹹水のままで使用することをお奨めします。

塩は國力

自家用製塩の急務なことは前に述べた通りですが、政府は自家用製塩が海岸地方では一戸残らず實行されることを期待してをります。それと共に他面、塩の使用方法を再検討して、大根は乾してから漬け、漬汁は家畜の飼料に混ぜる等、一層塩の有效利用の途を研究して消費の節約に努めて戴きたいのです。

塩は生命の源であり、兵器であり、國力です。決戦いよいよ青洲なときに當つて、一億総つて塩の増産に、節約に努め、大東亞戦争を勝ち抜かうではありませんか。

(大藏省)

郵便料金の改正

四月一日から郵便料金が別表のやうに改正されました。今度の改正に當つては、特に一般國民の負擔を出来るだけ軽くするため、引上げ割合を極力低率にしたほか、取扱ひを簡易化し、切手の種類を整理すると共に料金の種類段

階をも單純化しました。なほ舊料金の郵便葉書は改正料金との差額だけ切手を貼らなくてはなりません。切手がもし品切れとなつた際は、葉書を出すとき、または前以て郵便局(無集配特等局を除く)に提出して料金収納印を押してもらつて置き、必要な場合に使用するやうにして下さい。(この表は切取つて手帳に貼つたりして用ひして下さい)

主要郵便料金表 (昭和二十年四月一日改正)

種別	重量	料金
第一種 (郵便物)	一〇グラム迄	一〇銭
	一〇グラム以上	一五銭
第二種 (郵便物)	一〇グラム迄	一〇銭
	一〇グラム以上	一五銭
第三種 (郵便物)	一〇グラム迄	一〇銭
	一〇グラム以上	一五銭
第四種 (郵便物)	一〇グラム迄	一〇銭
	一〇グラム以上	一五銭
第五種 (郵便物)	一〇グラム迄	一〇銭
	一〇グラム以上	一五銭
小包郵便料	二キログラム迄	四キログラム迄
内地相互間	一五〇銭	一五〇銭
内地外地間	二四〇銭	二四〇銭

週報

昭和二十年四月一日
発行日 四月四日

本誌一冊
毎週一回

郵代(郵十) 一冊
郵代(郵十) 一冊

編者 東京新聞社

印刷者 東京新聞社

発行所 東京新聞社

各地方支店 東京新聞社

週日誌

三月二日(金) 三月十一日(日) 三月十二日(月) 三月十三日(火) 三月十四日(水) 三月十五日(木) 三月十六日(金) 三月十七日(土) 三月十八日(日) 三月十九日(月) 三月二十日(火) 三月二十一日(水) 三月二十二日(木) 三月二十三日(金) 三月二十四日(土) 三月二十五日(日) 三月二十六日(月) 三月二十七日(火) 三月二十八日(水) 三月二十九日(木) 三月三十日(金) 三月三十一日(土)

種別	料金
日満小包	一五〇銭
軍事小包	一五〇銭
特取扱	一五〇銭
書留料	一五〇銭
価格表記料	一五〇銭
配達証明(普通郵便)	一五〇銭
配達証明(郵便物)	一五〇銭
速達料(普通郵便)	一五〇銭
速達料(郵便物)	一五〇銭
訴訟、審判、審査及び徴用書類特別取扱料	一五〇銭
郵便葉書(普通郵便)	一五〇銭
郵便葉書(郵便物)	一五〇銭
業務用書類(一五〇グラム迄)	一五〇銭
業務用書類(一五〇グラム以上)	一五〇銭
到達證料	一五〇銭